

氏名	セン 錢	オウ 鷗
学位(専攻分野)	博士(文学)	
学位記番号	文博第86号	
学位授与の日付	平成9年3月24日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
研究科・専攻	文学研究科中国語学中国文学専攻	
学位論文題目	清末の学術と明治日本	

—初期の羅振玉と王国維を中心に—

論文調査委員 (主査) 教授 興膳 宏 教授 川合康三 助教授 平田昌司

論文内容の要旨

序章

近代中国の学術史において大きな功績をのこしている羅振玉と王国維、この二人が同じ時期に日本に渡り、当時の日本の学術界と大きな関わりをもったことはよく知られているが、実は来日以前においても明治日本の学術文化と密接な関わりがあった。この論文では二人の渡日前の事跡を追跡しながら、清末の学術と明治日本との関わりについて考察する。

第一章 清末改革の渦中の上海

第一節 務農会・『農学報』の諸要素

古文物、古籍或いは古文字学を中心とした分野で高名な羅振玉が、農業関係の仕事から出発したというのは、一見奇妙に思われる。しかし彼が雑誌の出版、しかも農学を専門としたことは、偶然ではなかった。それは、広くその時代から見れば、清末の改革、ひいては中国の近代化の多岐にわたる模索の一つであり、また彼個人について見れば、彼の人生・学問・思想と密接に関わる必然の結果であった。務農会の設立、雑誌『農学報』の発行に力を絞った上海時代、ちょうど三十代におさまるこの十年間こそ、後の生涯の大事業の基礎を築いた、自己形成の重要な時期である。

中国の新聞・雑誌は西洋人宣教師、商人らの手によって始まったが、しだいに中国人自身による刊行も盛んになり、日清戦争の敗北を機として一気に活発になった。ことに維新派による学会の設立、新聞の発行、西洋学術の翻訳による紹介が、上海を中心に精力的に行われるようになり、羅・王が上海に移ったのもそうした気運に乗じてのことであった。

羅振玉は「郷試」の失敗、家庭の経済的事情のために故郷で家庭教師を続けていたが、三十歳の時に日清戦争が終結したことは、本来懐いていた「経世之心」を刺激し、大きな転機をもたらした。新しい改革が提唱されていた時代の熱気のなかで、西学の学堂を設立しようとしたのである。変法・維新に同調していた姿は後年の彼とはかなり異なるものであり、当時は時代の先端に立つ一人であった。それまでに接し

ていた翻訳書が自然科学・農業・歴史地理関係に限られていたために、おのずと西洋の実学を目指すことになったが、それは羅振玉の西洋受容のかたちを決定し、彼にとって西洋は結局実用的な技術を学ぶ対象であって、中国の伝統的な知の体系とは並ぶことのできないものであった。これは羅と王の違いを示す指標ともなる、二人の本質的な相違である。

維新運動の具体的政策としては、農業の近代化がとりわけ重視された。それは羅振玉にも影響を及ぼすこととなった。後年、彼は維新派と対立していたかのように自分を描いているが、実際には高まっていく維新運動に共鳴して上海に向かい、維新事業に参加しているのである。

羅振玉が農学を志向したのは、国家の再建のためのみならず、個人のためでもあった。それによって名をあげて一家を成すことも可能であろうし、加えて経済的な理由もあった。一族の生計を立てる必要に迫られていた彼にとって、「事業」は、まず経済的な益をもたらす「職業」でなければならなかったのである。収益をもたらす事業のなかでも、多大な資金を必要としない農業は彼にとって現実的な選択であった。羅振玉は机上の空論に溺れることのない、現実感覚を備えていた人であった。そしてまた、農業振興に携わることは不安定な政治状況のなかにあって、安全な道でもあった。

羅振玉が農学から出発したことは、このように時代的、個人的状況が必然的にもたらしたものであった。

第二節 『農学報』の創刊とその影響

務農会は雑誌『農学報』を刊行して啓蒙教育を開始することになった。その販路のためには汪康年を中心とする『時務報』グループに頼った。『時務報』の変法維新の精神と共通する性質があったのである。

『農学報』の内容は、政治に関する議論は抑えて農業に限った。イデオロギー性のない、一つの専門分野だけに限定した雑誌は、当時の中国にはほかになかった。これは羅振玉の見識である。この方針によって『農学報』はその後の政治の波を乗り越えることができ、同じ時代の風潮から生まれた多くの試みが潰えていったなかで、羅振玉が中国近代農業の功績者として記憶されることになったのである。

務農会の発足、『農学報』の発刊は、たちまちのうちに各界の反響を呼び起こした。政見・系統・学派の異なる代表的な人物を幅広く糾合した学会は、当時ほかに例を見ない。販売量も徐々に伸びて、朝野に広く浸透していった。

一八九八年、光緒帝の「百日維新」が始まったが、務農会の活動は天子に上奏されるまでになり、朝廷・皇帝の注目を受けて、農工商総局が開設されるに当たっては務農会の活動がモデルになった。これによって務農会、『農学報』は広く注目を集め、羅振玉は近代農学を切り開く先駆者として名を朝野に広く知られていった。これは後に彼の前に仕途の門が開く契機にもなった。地方の一「秀才」にすぎなかった無名の青年が、変動の時流の渦に乗ったかのように、一気に駆け上がり、近代農学界の第一人者として名実ともにその地位を確立したのである。

第三節 羅振玉の早期学術活動に対する評価をめぐって

羅振玉の農業技術啓蒙における功績、四大発見（甲骨文、敦煌学、漢晋の木簡、明清資料）の業績など、個々の領域については高く評価されているものの、羅振玉自身については、その人格のためか、いまだに評価は低い。しかし各分野における成果は、羅振玉という人間あつての達成であり、羅振玉の全体を対象としてこそ、それぞれの分野における意義も理解できるはずだ。

また一方、従来の近代史研究においては、「近代」を基準に価値評価を下し、過去を単純に図式化しすぎたきらいがある。それでは中国の伝統を生かしながら西洋を受容していこうとする考え方は評価されないことになる。羅振玉の複雑な思考体系も近代絶対化の視点では捉えにくい。新と旧、西洋と東洋両者の価値とその変容を相互の関連のもとに同時に展望しない限り、中国近代の真の姿を解明することはむずかしく、ひいては東洋近代のほんとうの歴史的意味も理解できない。

『農学報』の発刊は大きな反響を呼んだのだが、政治状況のめまぐるしい変化は影響を及ぼさずにはおかなかった。「百日維新」に続いて起こった「戊戌政変」は、維新運動を壊滅させた。『農学報』は政治イデオロギーを抑えた性質ゆえに停刊を免れたが、多くの同志が離れて行き、羅振玉は一人で運営していかざるをえなくなった。彼は農学叢書の刊行などで切り抜け、政変後の新たな体制とも手を結んで生き延びることができた。それについて保守派に投降した、保守に「転身」したなどと評されているが、それでは事実を掌握できない。彼の思考はもともと維新か保守かといった二項対立を越えたものであったのではないか。

上海時代はまた金石学においても、後年の基礎を築く重要な時期であった。つとに少年時代から興味を懐いていたが、金石に関わるには「学」のみならず「金」も必要であった。蒐集家と交わるには「地位」もなければならなかった。上海時代に築き上げた農学啓蒙家としての名声、経済力は、後年の収集、整理、研究の基礎となったのである。

第二章 明治学術界との接点

第一節 日清戦争後の中国に与えた日本の衝撃

日本は日清戦争の勝利によって空前の「中国進出」のブームが盛り上がっていたが、中国でも敗北を契機として繰り広げられた維新運動の中で、日本の存在は大いに注目されることとなった。そのために「新学」はすでに単なる「西学」ではなくなり、日本の比重が西洋と対等になるまでに至った。

第二節 『農学報』から始まった羅振玉の日本との関わり

羅振玉らの務農会・『農学報』の事業にも「日本ブーム」は影響を与え、日本の農業紹介の増加にともなって、日本語翻訳のために上海へ招かれたのが、古城貞吉である。古城は翻訳を担当したのみならず、日本とのパイプ役として重い存在となった。

古城の責務が多すぎるために、日本語翻訳者として新たに加わったのが、藤田豊八である。羅振玉が藤田と出会ったことは、彼の生涯において大きな意味をもつことになった。

第三節 東文学社

一八九八年に中国で最初の日本語学校である東文学社が上海で開校した。これは羅振玉、藤田豊八、そして王國維が一堂に会した場であり、後年の日中学術交流に大きな意味をもつものであった。

日本に熱い視線を注ぐのはこの時期瀰漫していた風潮であったが、東文学社が他と異なっていたのは、日本を西洋摂取の手段とするのではなく、日本そのものに価値を認めていたことである。その具体的実践の一つとして、東文学社では他の学校が通訳を介して授業をしていたのに対して、まず日本語の学習を課し、そのうえで日本語の教科書を用いる授業を行った。この方針は予期せざるほど豊かな果実をのちに生み出すことになった。

東文学社に招かれた藤田豊八の熱心な教育態度は、羅振玉・王国維らに深い感動を与えるものであった。羅振玉の藤田への信頼は終生変わることがなかった。

変法維新運動に共感し、新学に志していた王国維は、時務報に勤務しながら、東文学社に入学した。そこで羅振玉と出会ったことは彼の学者としての人生に大きな意味をもつが、それに劣らず重要なのは、藤田豊八の指導を受けたことである。藤田を通して王国維は日本、西洋の知的世界に目覚めていった。

第四節 近代中国学・東洋学の生成とその先駆者藤田豊八

明治維新後、日本は西洋をひたすら受容しようとするあまり、漢学は衰退に向かったが、その反動として漢学を見直し、儒教イデオロギーを強化しようとする動きも起こった。そうした模索の中から従来の東洋の学問・文化を西洋の近代的思惟によって体系化しようとする人々があらわれ、そこに新たな東洋学が誕生した。そうした近代学術の基盤を用意したのは、設立されて間もない東京大学であった。藤田豊八はそうした学問の新たな胎動の中で自己を築きあげていった。

第三章 『教育世界』の時代——王国維を中心に

第一節 『教育世界』の成立と内容

清末に洋務運動の一環として「新式学堂」が各地に設立されていったが、日清戦争の敗北を機に、機械技術の導入以上に、国家制度全体の改革が唱えられるようになり、教育制度の改革も日本がモデルとされた。一九〇一年に羅振玉が創刊した『教育世界』も日本の教育のありかたを紹介しようとするものであった。やがて『教育世界』の事実上の編集責任者は王国維に移った。それを機に『教育世界』は実用的な記事から広く人文科学全般へ転換し、従来の翻訳中心の内容から編集者自身の論文が増える方向へ変貌していった。

張之洞、羅振玉は教育を国家有用の人材を育成するためという功利的な手段としてしか認識していなかったが、王国維は全人格的な陶冶とまで考えていた。彼が真に近代的な教育の理念を身につけたのには、日本人の著述が与っていた。それは彼の論文に見られる日本の論説との類似から確認することができる。

第二節 『教育世界』の無署名文章

『教育世界』の無署名論文のなかに王国維の執筆したものが相当数にのぼることが最近明らかにされてきたが、しかしそれらの多くは実はもとになる書物が存在するのである。なかには日本語原本の忠実な翻訳といってよいものまで含まれている。種本の中で西洋哲学、教育学、また中国哲学などの書物は、ほとんど明治三十年以後の、帝国大学の出身者を中心としたグループのものばかりである。すなわち明治日本の言論界においても、啓蒙一辺倒でも東洋への回帰でもなく、純粋に知的対象として西洋の近代を受容した立場である。王国維の論説にこのような種本が存在していたことは、決して彼の価値を下げるものではなく、様々な思潮が渦巻く中において、最もすぐれた達成を確実に察知し、吸収した彼の鋭敏さを示すものだろう。そしてこれは、今まで考えられてきたよりもずっと早い時期から王国維が日本の学术界と重要な接触をしていたことを物語るものである。

論文審査の結果の要旨

羅振玉と王国維は、清末から民国初年にかけての国学の発展に相協力して貢献した学者であり、二人の

名は中国近代学術史の上に大きな位置を占めている。彼らが辛亥革命ののち、日本に渡って京都に住み、狩野直喜・内藤湖南を始めとする京都の学者たちとの交流を通して、日本の学術界に多大の影響を与えた事実はよく知られている。本論文は、羅・王の来日以前の時期、いわば学者としての形成期における両者の事跡を追究しながら、清末の学術のありかたを探り、彼らと明治期日本の学術との関わりを考察しようとするものである。

本論文は、三つの章から成っている。まず第一章「清末改革の渦中の上海」は、羅振玉の前半生に当たる上海時代を取り上げ、この時期が彼の後年の学術上の達成に至る基礎を作った極めて重要な意味を持つことを論証している。淮安の貧書生だった羅振玉は、日清戦争のあと、維新運動の気運の高まる上海に出て、務農会を設立し、雑誌『農学报』を創刊した。『農学报』は、諸外国とりわけ日本の農業関係の著作の翻訳や、新しい農業技術の紹介を掲載し、中国の農業近代化に重要な役割を果たした。その間、「百日維新」から「戊戌政変」へと時代は目まぐるしく変転し、多くの新聞・雑誌が発行禁止処分を受けたが、ひとり『農学报』だけは時代の波瀾を乗り越えて、発行を維持し続けた。その最大の理由を、論者は、『農学报』が内容を農業の分野に厳しく限定して、時事を論ずるイデオロギー性を含まなかったことにあると述べている。それは彼の思考に、もともと維新か保守かといった二項対立を越える複雑なものがあったことにも通ずると、論者は主張する。羅振玉の生涯と学問を評価する上で、傾聴すべき見解といえよう。上海時代は、また羅振玉の金石学の基礎を築く上でも重要な時期として位置づけられている。

第二章「明治学術界との接点」では、日清戦争後の日本の「中国進出」と中国における日本への関心の増大を示す「日本ブーム」の中で、羅振玉と王国維が、日本の学術界との関わりをいかに求めていったかに焦点が絞られている。『農学报』の日本語文献翻訳のために上海に招かれた古城貞吉は、日本とのパイプ役として重きをなしたが、その後、新たにスタッフに加わったのが藤田豊八である。また、1898年3月には、羅振玉らによって、中国最初の日本語学校である東文学社が上海に設立され、藤田はその「教習」にも任じられて、献身的に人材の育成に当たった。彼の教えを受け、学問的にも多大の影響を蒙ったのが、ほかならぬ王国維である。

このころの日本への関心は、西洋文化を摂取するための手段として日本を利用するという考えに出るのがほとんどだったが、東文学社の教育は日本そのものに価値を認めていた点で、他と異なっていた。その具体的な実践として、各地にある西洋式の学校で行なわれていたような、通訳を介した「訳授」によるのではなく、日本語の教科書を用い、日本語によって教育する方法が採用され、大きな成果を生んだ。羅振玉にこの方法を提言したのは、藤田豊八ではなかったかと論者は推測している。

王国維にとって、羅振玉との出会いが、学者としての成長のための得難い機縁となったことは従来しばしば指摘されてきたが、彼の修業時代における藤田豊八の存在についてはさほど注目されることがなかった。しかし、実は藤田の指導のもとに、王国維は明治二十年代から三十年代にかけての日本の新史学にいち早く接し、また西洋の哲学や教育学への目を開かれるようになったことを、論者は王国維の初期の著作や関連する他の資料を詳細に調査した上で紹介している。その考証に際して、上海図書館所蔵の王国維の父王乃誉の日記が、王国維の思考と行動を裏づける新資料として有効に生かされていることも、本論文の特色の一つとして評価されてよい。

第三章『教育世界』の時代—王国維を中心に」は、近代最初の教育専門誌『教育世界』と王国維との関係を扱っている。『教育世界』は教育改革の気運に応じて、1901年5月に羅振玉が上海で発刊した雑誌で、毎月二回刊行され、1908年1月まで計百六十六冊を世に出した。初期のころは羅振玉自らがその編集に携わり、圧倒的な比重で日本の明治期の教育のありかたを、中国の教育が学ぶべき手本として紹介していた。だが、1904年2月に王国維が編集を担当してからは、その内容が一変して、広く人文科学の成果全般を紹介するようになり、とりわけ哲学を重視した編集方針が目をつけた。論者によれば、羅振玉にとって、教育とは国家に有用な人材を育てるための手段であったのに対して、王国維にとってのそれは、「一つの学問分野であるにとどまらず、人間の精神・文明のすべてに関わる営みだった」のである。

王国維が編集権を握ってからの『教育世界』には、多くの無署名論文が掲載されるようになったが、近年の中国での研究では、その相当数が王国維自らの執筆に帰せられている。しかし、論者は明治期の論著を広く調査した結果、それらの多くが実は日本人の著作にもとづくものであり、中にはその忠実な翻訳とってよいものも含まれていることを突きとめた。そして、それらの種本となった著作は、明治三十年前後の松村正一・桑木巖翼など哲学科出身の学者の創始した、西洋の哲学や教育学などを純粋な学問として研究する新しい方法に貫かれたものであること、さらにそうした方法が王国維の以後の学問の展開のために重要な啓示を与えている事実を指摘している。この発見は、本論文の白眉をなすものとしてよいが、明治期の日本の学問に対する深い理解と粘り強い努力が相俟って至り得た成果として、特に高く評価される。

論者はこのように初期の羅振玉と王国維の学問の形成について優れた知見を示しているが、なお不十分な点もないではない。たとえば、王国維の学問が形成される上で、藤田豊八と並んで大きな感化を及ぼした田岡嶺雲についての論及がほとんどないことや、『教育世界』に掲載された無署名論文と王国維の署名論文との関連についての目配りが十分とはいえないことなどがそれである。しかし、論者の意図する研究は本論文で完結したわけではなく、これからのさらなる探究に待つところが多いのであり、以後の研究の進展に伴って、それらの弱点も克服されてゆくものと確信する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1997年3月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事がらについて口頭試問を行なった結果、合格と認めた。